

高知の言葉と市場に学ぶ



後藤 健市 (ごとう けんいち)

場所文化クリエイター (地域活性化伝道師)

1959年帯広市生まれ。高校卒業後、札幌、東京を経て米国に留学。その後、ベンチャー企業（東京）にチーフディレクターとして参加し、国内家電メーカーの草創期のワープロやパソコンのセールスプロモーションを担当。86年に帯広に戻り、社会福祉事業に携わりながら、同時に地域づくりに取り組み、北の屋台、スノーフィールドカフェ、場所文化フォーラムなどの立上げや運営、食をテーマに地域活性化に取り組む会社設立に関わり、場所の価値を生かした地域づくりの企画・提案、実践を行っている。

たっすいがはいかん

「たっすいがはいかん」という言葉に出会ったのは、高知にある「ひろめ市場」に行った時のこと。

土佐弁（方言）であることは容易に想像できたが、意味はわからない。「いかん」はダメ、「は」はつなぎの助詞。そうすると問題は「たっすいが」となる。

「いかん」のだから、やってはいけない、これではだめだといったことを伝えているはず。この言葉は某ビールの写真の横にある。となると、ビールの宣伝文句であり、お酒に関することだとは思いますが…。

高知は、「酒好き」「酒が強い」というイメージがある。それは子供の頃から酒を飲んで鍛えているからではないかと、東京から来ている仲間が言い出し、それなら「子供は飲んだらダメ」ということでは！という話になったが、これではビールの宣伝文句にはならないし、さすがの高知と言えども法律違反である。

そんな冗談を言いながら、ひろめ市場に入ると、夜まではまだかなり時間があるにも関わらず、すでにビールや酒をワイワイ飲んでいる。そうか「昼間から飲むのはダメ」かも、それとも「飲み過ぎてくだをまくのはダメ」、「飲みではなく、食べ過ぎはダメ」ではないかと、勝手な想像と会話が続く。

ひろめ市場

ところで、この「ひろめ市場」は「いつ」「誰が」始めたのか。以下は、立ち上げ時の支配人に伺った話。

ひろめ市場のスタートは1998年秋。中心街の西地区、高知城のすぐ下という超一等地でありながら、所有者（東京）に具体的な利用計画がなく、青空駐車場になっていた場所。この“もったいない”土地に目をつけたのが、隣接する帯屋二丁目商店街振興組合。核となる商業施設をつくり、商店街の活性化を図ろうと考え、土地所有者や建設会社を巻き込み、駐車場機能（2Fから上）を併せ持った「市場」を立案した。

しかし、この計画は他の商店街からは必ずしも好意的に受け止められず、反対する意見も数多くあったが、初心を忘れず事業を推し進め、構想からわずか9カ月という短期間でオープンまでこぎ着けた。

その原動力はこの企画を言い出した人々の「覚悟」。

自分たちの思いを伝え、商店街だけではなく、それぞれが有する個人的なネットワークもフル活用し、多種多様な人を巻き込み、企画はもちろんのこと、テナント募集まで自分たちで行った。この自己責任のパワーが「ひろめ市場」成功の最大の原動力だと思う。

何でも批判するのが今の風潮だが、正論であったとしても、ケチをつけているだけでは何も変わらないし、何も生まれない。大切なのは行動！ということ。「ひろめ市場」は私たちに示してくれている。

方言の価値

さて、話を「たっすいはいかん」に戻そう。

ひろめ市場の中を食べ歩きながらあれこれ考えてはみたものの答えは分からないので、結局、近くにいた若者に聞くことにした。

「たっすい」とは「ゆるい」とか、「ぬるい」とか、「うすい」といったことで、とにかく「土佐人らしゅうないこと」を言うらしい。そのことを高知の友人に話したら、大きくうなずきながら、おれたちは「たっすいビールは飲まんぜよ」と話を付け加えてくれた。

土佐人にとって、今人気のあるビールは「たっすい」らしく、昔からの味の濃いしっかりしたビール、要するに「たっすくない」ビールが好きだとのこと。これはビールのし好の話だが、それだけではなく、土佐の気質といったものが感じられる。方言とは、まさにそういったものであり、その土地に暮らす人々の生活や気質を伝えてくれる大切なものなのである。

ちなみに、私のお薦めメニューは「塩たたき」と「ウツボのから揚げ」、高知ならではの味が堪能できる。

日曜日

高知には大切な仲間が大勢おり、紹介したい“人”も、伝えたい“こと”や“場所”も山ほどあるが、最後に日曜市を紹介させていただく。

高知で、日にちと場所を定めた“路地市”が始まっ

たのは元禄3年(1690)。その後、明治9年(1876)に太陽暦が採用され、「日にち」から「曜日」に変わった。今も、さまざまな曜日に「路地市」が開かれるが、一番有名なのは日曜日に開催する「日曜日」。場所は高知城の下を走る道路(追手筋)で、約1キロにわたって店が立ち並び、そのうちの約7割は農作物を販売している。観光ガイドブックにも紹介されているので観光客も訪れるが、基本的には地元の利用が多く、まさに「高知市民の生活市」として定着している。だからこそ、三百年以上も続いているのだろう。

店が五百もあり、販売されているものもそう変わらないのだから、当然同じような品物がいくつも並ぶ。が、やはり沢山売れる店とそうでない店がある。

中心部から近い、駐車場から近いなどの立地の問題もあるが、一番大切なのは「人」。あのおばちゃんの顔が見たい、あのおじちゃんと話したいという、魅力ある店主が何人もいて、その店にはなじみのお客さんが立ち寄り、楽しそうに会話している。

市場というと客引きの大きなだみ声をイメージするが、日曜日にはそういった声はない。聞こえてくるのは、出店しているおばちゃんやおじちゃんとお客さんの会話、そして隣り合った出店者同士の会話。

出店しているおばちゃんに話を聞くと、お金を稼ぐことも大切だが、それ以上に、週に一度ここに来て、出店仲間と会うのが楽しみだとのこと。その“のんびり”かつ“ゆったり”した雰囲気の日曜日全体を包み、活気がありながらも、ほのぼのとした豊かな時間を感じさせてくれる。

農水産物(商品)を「売る・買う」という商行為だけではなく、売る人同士、売る人と買う人が「たわいのない会話」を交わしながらその場のひと時を楽しむ。そんな“ほのぼの”市場が自分の街にもあったら…。

今年はおしゃれな市場“マルシェ”に注目が集まりそうだが、モノを買うだけでなく、豊かな時間を過ごすことを目的に市場に足を運んでみてはいかがか。これまで気づけなかった“大切な何か”が見つけれられるように思う。



ひろめ市場(写真左)
日曜日(写真下)

